

大学生におけるデートDVに関する認識

06418533 塩田萌

指導教員 中塚幹也教授

【緒言】

近年、ドメスティック・バイオレンス (DV) の被害が報道される機会は多く、婚姻関係にない若年層の男女における暴力である「デートDV」の被害も増加していることが知られている。しかし、若年者の中にはデートDVの認識が低く、自覚のないままDV被害者あるいは加害者となっていることも考えられる。今回、大学生におけるデートDVの実態とその背景を調査した。

【方法】

平成21年6月～9月、医療系大学生336名に対して、同意のもと無記名の自己記入式質問紙調査を施行した。調査用紙は、各自が封筒に厳封し、回収箱に投函する形で回収した。回収率は75.9% (255/336名)であった。内訳は女子205名、男子47名であった。

【結果】

● 背景

年齢は全体では20.7±1.9 (mean±S.D.) [18～37]歳、女子では20.6±1.6 [19～36]歳、男子では21.2±2.9 [18～37]歳であった。

● デートDVの認識

「知らない」、「言葉だけ知っている」との回答は4分の1であり、男女間で比較すると、女子では21.4%、男子では47.8%であり有意に男子が高率であった。また、交際経験のある群、性交経験のある群ではデートDVの内容を、「少し知っている」あるいは「よく知っている」との回答が有意に高率であった。

デートDVに含まれる項目の認識について、身体的暴力に関する項目は90%以上がデートDVと認識していたが、束縛に関する項目では、デートDVと認識している学生は半数以下であった。男女間で比較すると、多くの項目において男子の方が認識度は有意に低かった。

● 実際のデートDVの被害・加害経験

被害経験は、全体では36.3%であり、女子は38.6%、男子は25.5%であった。加害経験は、全体では25.2%、女子は26.1%、男子は21.3%であった。内容としては被害・加害とも束縛に関する項目が高率であった。

● 被害・加害経験と自尊感情・自己認知

被害・加害経験と自尊感情 (Rosenberg, 1965) との関係を見ると、加害経験のみ群では

35.0±6.0「25～47」点と高スコアであったが、有意差は見られなかった

自己認知に関して、「被害経験のみ」の群は社交の項目については高スコアであったが、性の項目では低スコアという特徴が見られた。

● 生活背景とデートDVの被害・加害経験

生活背景とデートDVとの関連では、朝食欠食や就寝時間の遅れ、長時間ゲームをする群においてデートDVの被害・加害経験が有意に高率であった。また、父親よりも母親と仲が良いと回答した群の方がデートDVの被害・加害経験が有意に低率であった。

【考察】

男女間で比較するとデートDVの認識は男子では低く、啓発が必要である。交際経験や性交経験のある群の方が、デートDVを知っているとの回答が高率であり、実際に交際する中で、実際にデートDVの被害者、加害者になっているためであると推測された。

デートDVである各項目のうち、身体的暴力に関する項目は、デートDVと認識されていたが、束縛に関する項目の認識は低く、このため、実際に起こっているデートDVの被害・加害経験とともに、束縛に関する項目が高率であった。デートDVに関して、言葉としてはマスコミなどを通じて知っているものの、その内容に踏み込んだ詳細な教育は行われていないことが予測される。特に、男性では関心も低く、自覚のないまま加害者となっている場合も考えられる。

デートDVと自己認知との関連では、社交性が高いほど男女交際に発展しやすく、デートDVの被害や加害を経験しやすいと考える。しかし、その社交性のスコアが高い群の中でも「被害経験のみあり」の群では、性的な項目のように男女の親密な関係に関しては、スコアが低く、デートDVの被害を受けていることが反映されている可能性がある。また、デートDVの被害・加害経験とは、生活リズムの乱れや親子関係と密接に関連していることが明らかとなり、この点も考慮した取り組みが必要であろう。

【結論】

大学生においても、デートDVの詳細に関する認識は低く、啓発が必要であると考えられた。特に、身体的な暴力に発展する前に、パートナーを束縛するなどの行動の予防が必要である。男女間のコミュニケーション、男女同等なつきあい方などの感覚を身につけていく小学生、中学生などの早い年代での教育が必要であろう。

